

| | |
|---------|--------------------------------------------------------------------|
| 氏名 | 伊東 春香 |
| ヨミガナ | イトウ ハルカ |
| 学位の種類 | 博士（美術） |
| 学位記番号 | 博美第599号 |
| 学位授与年月日 | 平成31年3月25日 |
| 学位論文等題目 | 〈論文〉 コンビナートを描くーノスタルジーから生まれるユートピアー 〈作品〉 satellite（サテライト） 〈演奏〉 |

論文等審査委員

| | | | | |
|----------|--------|-----|--------|-------|
| （主査） | 東京藝術大学 | 教授 | （美術学部） | 齋藤 典彦 |
| （論文第1副査） | 東京藝術大学 | 教授 | （美術学部） | 佐藤 道信 |
| （作品第1副査） | 東京藝術大学 | 教授 | （美術学部） | 植田 一穂 |
| （副査） | 東京藝術大学 | 准教授 | （美術学部） | 海老 洋 |
| （副査） | | | （） | |

（論文内容の要旨）

過去に見たことのあるような風景や聴いたことのある音など、人の五感に触れる外部からの刺激で、一瞬にして当時のことを思い出し、懐かしく感じることもある。ノスタルジーと呼ばれるこの感情は、時間の流れを意識させ、切なくさせると同時に、愛しい気持ちと安心感を覚えさせる。私がテーマとして描いているのは、このノスタルジーを感じた瞬間であり、具体的には主にコンビナートの夜景をモチーフに制作している。

ノスタルジーという過去の記憶が掘り返された心地よい感情を描くことは、不確かな未来とは対照的に、裏切らない過去として、誰にも侵されない自分だけの安心できるユートピアを創り出すことである。

しかし見方を変えれば、ぬるま湯に浸かっているかのようなこの安心感に、未来は希望とスリルを与えてくれるものであるとも言える。

本論文では、制作を通してこの考えに至った経緯と、ユートピアを創造する試みを論じた。

第1章「コンビナートを描く」では、第1節で、自身が煤煙を吐く工場群よりクリーンなコンビナートに惹かれ、それをモチーフに選んでいる理由を明確にするため、まず産業革命以降の歴史について述べた。コンビナートは、工場が集まった工業地域のことを指すが、機能ごとにつくられた工場施設同士を、生産性の向上のため近くに結びつけたことで、特異な景観を生んでいる。小さな「工場」からこの「コンビナート」への移り変わりは、石炭から石油への燃料の変化や公害によって、市街地から遠ざけられた結果としての“歴史”である。また景観評論家・岡田昌彰の分析を引用して、コンビナートの形としての魅力について述べた。第2節では、コンビナートに「美」を感じる人の心の動きから、相反する「醜」がその魅力を際立たせているのではないかと、という仮説について考察した。第3節では、自作品の中でコンビナートとともに現れるモチーフである「海」と「星」について論述した。海と星は昔からずっと変わらずに存在し、近い未来にも変わることがない時間を超越した存在として、未来を感じさせるモチーフであること、また自身と自作品のバランスを保ってくれる要素であることを述べた。

第2章「ノスタルジー」では、第1節で、コンビナートとノスタルジーが結びついた修士課程の修了作品に

ついて、その時の自身の心の動きについて述べた。第2節で、3歳まで住んでいた造園土木業を営む祖父の家の環境が、コンビナートにノスタルジーを感じる自身の原体験となっていることを述べた。第3節では、自身が考える記憶の構造について、記憶とは本来危機回避能力であるという仮説について論じた。また、「些細な出来事がとんでもない大きな現象の引き金となることがある」というバタフライエフェクトを軸に、これまで積み重ねてきた記憶と過去が、奇跡的に噛み合せて現在に至っていることを述べた。

第3章「ノスタルジーから生まれるユートピア」では、第1節で、様々な理想郷の中からもなぜトマス・モアのユートピアを援用したのか、また、自身が画面の中にユートピアを創り出す過程について述べた。第2節では、ユートピアを実現させるために自身が試みている色調について、第3節では、ユートピアを実現させるための構図について述べた。そして第4節で、提出作品を解説した。

(論文審査結果の要旨)

本論文は、コンビナートの夜景をモチーフに描いている筆者が、ノスタルジー、ユートピアとの関係から自作品を論じた創作論である。

近年コンビナートの夜景は、壮麗、近未来性と同時に、不安や恐怖にも通じる妖しい魅力で人気を集めている。「テクノトピア」ともいわれるテクノロジーが生んだユートピアのような光景は、現代を代表する先端的景観の一つだが、筆者はなぜかそこに強いノスタルジーを感じるという。第1章「コンビナートを描く」では、まず産業革命からコンビナートが形成されるまでの歴史を概観し、鉄道や自動車などの機械とスピードがもたらした時間・空間認識の変化と、それが美術に与えた影響(未来派宣言、ターナー、1920年代アメリカのマシン・エイジなど)を確認する。それらの多くは、機械に明るい未来を見ていたが、戦後の公害と環境問題をクリアしてきた現在のクリーンなコンビナートの夜景人気には、「工場萌え」といった一種オタク的意識の動向が背景にあることがわかる。一方、筆者はこれまで自作品に海や星など時間をこえた存在も描いてきており、それが海浜エリアにつくられるコンビナート、星がきらめくようなその夜景にひかれる一つの伏線になっているとする。

第2章「ノスタルジー」では、筆者がコンビナートにノスタルジーを感じる理由が、幼少期の遊び場だった造園土木業の祖父の資材置場、びっしりと工具が並んだ工具棚や、パイプ、木材などが所狭しと置かれた風景の記憶にあったことが明かされる。危ないからと触れることを禁止されていた工具や資材に興味津々だった幼少期の記憶が、コンビナートの無数のパイプや、危険と美しさが交錯するその光景に、強くひかれた理由という。一見、近年の「リケジョ」(理系女子)ブームの反映かと思われた動機が、きわめて個人的な記憶にあったことがわかる。モチーフを捜して訪れた四日市のコンビナートが、コンビナートを描き始める起点となっただけで、そこを訪れたこと自体、予感があったからだろう。そして第3章「ノスタルジーから生まれるユートピア」で、現実逃避と理想追求というユートピアの二重の属性を確認した上で、筆者の場合はそれがノスタルジーで、絵画制作はそれによるユートピアの現出であるとして、提出作品「satellite」を解説する。

俯瞰構図の提出作品では、洛中洛外図から援用して、町並が工場群に、金雲が煙突からなびく煙に変えられている。また全体のグレーの色調は、それが記憶とノスタルジーの風景であることを示唆している。論述では、提出作品にいたる表現やコンセプトの推移、その分析と理由づけが的確に行なわれており、構成、文体ともに明快で読みやすい。学位論文にふさわしい論考として、審査員一同の承認を得た。

(作品審査結果の要旨)

申請者がコンビナートをモチーフとして制作するようになったのは修了制作がきっかけだった。それまでも街並みやビル群、船など建造物をモチーフとしたものを多く制作してきた。しかし枚数を重ねていく中で、それが建造物の視覚的な美しさや面白さに惹かれての事だけだと気づく。作業的に漫然と仕上がっていく作品に歯がゆさを覚え、描きたいという制作の根底にある動機をもう一度見つめ直す必要を感じていた。そんな時に出会ったのが夜のコンビナートだった。光の煌めきとともに闇夜に浮かび上がる巨大なコンビナート。異

世界のようなそのたまたまに一瞬で魅了されていく。そして同時に何故かノスタルジーという感情が湧き上がってきたという。この感情を探っていくうちに、それが幼児期の記憶に起因することに気付く。造園業を営んでいた祖父の家の倉庫に、身の丈を超えるほどの高さで整然と並ぶ資材や道具類。これらの圧倒されるほどの巨大で複雑なシステムを見た時の感情が申請者の原風景なのだと確信する。それ以来ノスタルジーという感情を画面に投影し、自分なりのユートピアを創造することがテーマとなっていく。

提出作品「satellite」は縦 250 cm×横 540 cmの画面全体に俯瞰したコンビナート群を描いた大作である。四日市、川崎、水島等様々な場所のコンビナートを取材してはいるが、イメージを優先させ非現実感を高めることで、ノスタルジーという感情を投影した自分だけのユートピアの創造を目指す。制作にあたり「洛中洛外図屏風」(舟木本)を参考にしたというが、屏風同様に、煙突から出る煙(水蒸気)を雲に見立て俯瞰の視点を際立たせ、現実には目にする事の出来ないミニチュア化された風景を画面の中に収めることで、玩具のように自分だけの絶対的なユートピアの創造を模索している。巨大な画面とも相まって、鑑賞者はあたかも小人になってコンビナートの中をさまよっている様な錯覚を覚える。そして申請者は制作する過程で、ノスタルジーという感情は極めて個人的なものでそれぞれの心象を投影した風景を共有することはできないが、絵画は個人的なものを内側から外へと発信する媒体としても存在しているという考えに至るのである。大画面をコントロールする構成力、技術ともに確かなものであり、画材である岩絵の具の特徴ともいえる物質感をともなった画面の完成度は高い。

以上の点から、審査会においては審査員全員の評価と承認を得、学位にふさわしい作品であると判断し合格とした。

(総合審査結果の要旨)

申請者は論文の最後で「おそらく、コンビナートが作られ始めた時代や、何百年前の人々も、同様に不安を抱きながら、此処ではないどこかにユートピアを求めて生きていたのだろう。各自が抱いたユートピアは、現実や身近なもの、幻想や空想など様々だったはずだが、私が見つけたユートピアは、ノスタルジーという過去を作品にすることであった。」と書く。そして作品は単に、過ぎ去った過去への感傷(ノスタルジー)ではなく、未来へ向け開かれた積極的なもの(ユートピア)であるとする。だからこそ、それは申請者が描き続ける根拠となり、鑑賞者に希望を伝えうる装置としても機能するのだろう。

そのユートピアに描かれるライトが明滅するコンビナートの夜景は、夜空の星々や、彼女の幼児期の祖父の倉庫へ記憶、よく遊んだカラフルなおもちゃなど、さまざまなものが均質にミニチュア化され集積することへの偏愛(ノスタルジー)とも重なり、制作の重要なテーマとなっている。申請者は、論文においてはその理由を探るべく論考を重ね、作品においては、ユートピアとしてさらに深く具体化させようとした。

論文の第1章では、コンビナートの歴史、人々が夜景に惹かれる理由、申請者の星や海への思いについて。第2章では、ノスタルジーを形成するもの、申請者の心の奥底にあった祖父の倉庫の工具の山、記憶の構造について。第3章では、ノスタルジーとユートピアとの関係、グレーという色へ変換、ミニチュア化し俯瞰することについて。第4章では、その例としての提出作品の解説。終章では、ノスタルジーの発生と制作(ユートピア)との関係を図式化し、論考の結びとした。このように丹念に制作の背景や経過をたどり、思考の経過を作家ならではの創作論として適切にまとめた。

作品は、コンビナートの夜景と星座の瞬きを重ね合わせるシリーズのなかでも最大のものであり、これまでの試みの集大成ともいべき作品となった。洛中洛外図屏風を参考とした俯瞰構図や、雲に替わるものとして煙突からの水蒸気を配した画面は完成度も高く、申請者の確かな力量を感じさせる。

以上の点から審査会において審査員全員が論文、作品ともに学位にふさわしいものであると評価し、合格とした。